

---

# 銀魂 魔王襲来篇

クロフォード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂 魔王襲来篇

### 【Nコード】

N7349E

### 【作者名】

クロフォード

### 【あらすじ】

ある日の江戸で、天人最硬の体を誇る“玄武族”が江戸を自分たちのものにしようと、計画を企てていた！銀さんを含む万事屋ファミリーはある男に依頼を受け、玄武族と戦うことになる。一方真選組は、近藤、土方、沖田の三人が最近怪しい行動をしている玄武族の拠点を調べに行く。しかしこの後、銀時・近藤が捕まり、土方・新八が重軽傷を負い、残された夜兎、神楽と真選組随一の剣術の使い手沖田は手を組み、二人だけで玄武族の拠点に乗り込むことになる。

メガネキャラはダメキャラかっていうと案外みんなダメキャラだったりする（前

初めて書くことになりました銀魂。

僕はこの作品は神が か っていると思うのです。

初めて見たときに何気なくコミックを手にとってしまったてそれから  
ハマりだしました。

どうぞ見てください。

メガネキャラはダメキャラかっていうと案外みんなダメキャラだったりする

とある日の万事屋

今日も、朝早くから新八がグータラな二人を起こしにきた。

「神楽ちゃん、朝だよ起きて！」

「うゝゝん……酢昆布ウウウウウ……」

「ほら銀さんも起きてください」

「うゝゝん……何言っただよかーちゃん、今日は土曜だぜ……ジャンプは明日だあ」

「誰がかーちゃん！？寝ぼけてないで早く起きてください銀さん！」

いつも通り、朝からツツコミを入れる新八。

「新八」

「あ、神楽ちゃんやっと起きた」

「私 酢昆布切らしてるの忘れてたアル ちよっとお前買ってこいヨ ゴルア」

「なんで僕パシリみたいになってるの？なんで上から目線？」

「新入りが口ごたえすんなヨ さつさと買ってこいやパシリの新八」

「んだとコルアー！僕はパシリじゃないぞ！！僕にはツツコミという大事なポジションがあるんだよ！！」

「比率にすると8：2アル！」

「え？何それ？百歩譲っても ツツコミ8 パシリ2 だよね？」

「おゝい 朝からウルセーなあ」

「あ、銀さん」

「銀ちゃん」

「神楽あ さっきの言いすぎだぜ 新八はメガネという大事なポジションがあるんだぞ」

「おいなんだよメガネって メガネなめんなよコラ」

「でも銀ちゃん よく考えるネ！どんな漫画でもメガネはダメキヤラヨ！」

「おーそうだな」

「テメーら メガネを全否定かアアア！！テメーらそんなにメガネがキライか？それとも僕がキライなのか？僕の存在価値を全否定してるのかアアアア！！」

「じゃ メガネのパシハ君<sup>はち</sup> 俺はアイスで」

「おiiiiiiiiii！誰がパシハだアアア！しかもちゃっかり注文してんじゃねええええ！！」

「新八 廁の紙も切れてるネ 酢昆布のついでに買ってこいヨ」

「いやトイレットペーパーのついでに買ってこいって言えよそこ」

そして、新八は仕方なく買い出しにいくのでした。

「まったく……あいつら……ただですら依頼が無くてお金が無いのに……」

新八がそう愚痴をこぼしながら階段を上っていると、後ろから大男がきた。

「もし……あなたは万事屋の方ですか？」

「え、はい そうですけど」

「実は……」

「銀さん！！大変です！！」

「あ、新八！酢昆布買ってきたか？」

「どした新八？メガネが割れたか？」

「違います！依頼人です！！」

「！！」

「いやあ、お兄さん！今日はまたどうしてこんなところに？」

「銀さん！依頼ですってば！」

「おお そうだったな で どんな用で？」

「はい……あれは先週のことでした…… 私は朝の犬の散歩が日課なんです…… その日に限ってあんなことが起きるとは……！！」

「何があつたんですか？」

「あなた方は“玄武族”を知っていますか？」

「玄武族？」

「玄武族って、あの天<sup>あまんと</sup>人最硬の体を誇る玄武族ですか？」

「そうです……あいつらは幕府が用意した江戸の端にある城を拠点としているんですが、私はあいつらが来る前からその辺りを散歩し

ていました しかしその日 私はバツタリと酔っ払った玄武族に会ってしまいました 私の犬はとても利口で ヒモ無しで散歩させていました 私の犬はその酔っ払った玄武族の所へ走っていつてしまいました 私は必死で呼び止めました しかし私の犬はその玄武族によって捻り潰され……ウッウッ」

「グスッ……兄ちゃん……私もペットが死ぬその痛みわかるアル……」

「神楽ちゃんの場合ペットを殺しちゃった痛みじゃん」

【バキ！ドカ！バキ！】

「ギヤアアアアア！ー！ごめんなさい！ごめんなさい！ー！」

「そんじゃ兄ちゃんよ 依頼ってのは そいつらに喝を入れてくればいいんだな？」

「いや違っネ 銀ちゃん 抹殺アル！」

「お前 もうすでに一人抹殺してんじゃねえか」

「頼みます……私のペットの敵をとってください……！ー！」  
かたき

「私に任せるヨロシ！絶対にワン公の敵とってくるアル！」

「で……でも相手は玄武族だし しかも幕府の御墨付きですよ」

「気にすんなって 俺たちは万事屋だ なんでもするぜ」



「いざ 出陣ネ！　いくよ定春！！」

「わん！！」

「あ！ちよつと待ってください銀さん！」

ドタバタと万事屋から出て行く一行。

そのころ真選組屯所では

「最近　天人の玄武族の一部が窃盗から殺害まで怪しい動きをしているという情報が入った　そこで　松平のとつとあんからの指令でこれから拠点に向かう　大人数での行動はこちらも避けたい　そこで　トシと総悟　お前らはこれから俺について来てもらおう」

「ウス」

「わかりやした」

「他の者は　俺たちのいない間　真選組を頼んだぞ」

「はい　わかりました！」

「よし　行くぞ」

「よっしゃー！これでジャンプ読み放題だぜ！！」

「冷房１８度にしよーぜ！」

「おい部屋締め切ろーぜ！」

「快適だ～～！！」

「おつ これ副長の刀じゃね？」

「ホントだ 落書きしちまおうぜ！」

「おい誰かペン貸せへへ……『土方バカウコ』」

「おい大丈夫かよ そんなことして！」

「大丈夫このペン水性だから」

「え！？それ油性だぞ！？」

「は？ウソオオオオオ！！お前コレどーすんの！？コレお前のせいだぞ！！」

「いや書いたお前だろ！！」

隊士たちがギャーギャーやっている一方、近藤たちは

「あ そうだ 屯所に刀忘れてきた」

「トシ早くしろよ」

「スンマセン近藤さん」

「まったく…なにやってんだあ土方さんは 近藤さんこんな奴置いていきやしょーよ こんな奴連れてっても足手まといになるだけさあ」

「近藤さん刀貸してください こいつの頭ぶった斬ってやります」

「いいから早く行け トシ！総悟も何も言っな！」

「ふあゝ気持ち良い」

隊士たちがくつろいでいると、急に扉が開いた。

【ガララ】

「ん？寒……」

土方の前にはなんともまあ 隊士たちのだらけた姿があった。

「ふ……副長……!!!!?」

「おい……これはどういうことだ? テメーら何してやがる?」

「ち 違うんです副長!! これは……」

土方は隊士の言い訳も聞かず、自分の置き忘れた刀を拾おうとした。  
土方は自分の刀の異変に気付いた。

「おい……」

「そ……それはこいつがやりましたアア!!」

「ち……違いますコイツが……!!」

「全員そこになおれ……俺が一人ずつ粛清してやらあ!!」

「ギャアアアアアア!!」

メガネキャラはダメキャラかっていうと案外みんなダメキャラだったりする（後

いろいろな指摘をお待ちしています。

銀魂はいろいろと面白い発想、捻りが無いと書けない作品なので、

「つまらない」と思われても仕方ないと思っています。

どうか暖かい眼差しで見守ってください。

よく考えたら俺の人生って空回りばかり

銀時率いる万事屋一行は、江戸の端にある玄武族の拠点である城に着いた。

その城は、大木に囲まれて暗く 薄気味悪かった。

そこには、人間が見てはならない、とてつもない何かがあるような感じがした。

「銀さん これ……本当に行くんですか」

「カラスがメツチャ飛んでるアル！こつち睨んでるヨ！」

「あー ごめん新八くん 神楽ちゃん 俺ドラマの再放送予約するの忘れてたわ てことで あとよろしく」

バイクで帰ろうとした銀時。

「定春 追っネ」

「わん！」

【がぶり！】

「ギヤアアアアアア！！」

「銀さん これ……本当に行くんですか」

「カラスがメツチャ飛んでるアル！こつち睨んでるヨ！」

「よし 行くぞお」

「でも銀さん どうやって進入するんですか？」

「進入？ そんなみみっちい事するかよ 男ならせいせいどつどつ胸を張って正面から行くんだよ おい神楽」

「アイアイサー！ ほあちやあああ！！」

【ドゴオオオオン！！】

神楽のキックに、城の門はいとも簡単にぶっ壊された。

「定春ッ 寄り道しないで家に帰るんだヨッ」

「わん！」

「よし 行くか」

「よし じゃないでしょ！コレ ちよっ まっ 銀さん！」

そのころの近藤たちは

「よし そろそろだな さて……どうやって入るか 正当方じゃ追  
い歸されるだろうし……」

「やっぱり 裏から侵入するしかねーよ」

「いや しかし もしそれで入れたとしても 奴らが黒だという証  
拠もなかったら 俺たちの首が危くなるぜ」

そのとき先頭を歩いていた沖田が立ち止まった。

「近藤さん どうやら手間が省けたようですぜ」

「ん？何だ総悟？」

「この通り 何者かによって門がぶっ壊されてまさあ」

「  
！！」

「なにがあつたんだ こりゃあ」

「しかもこのバイク 見てくたせえ」

「こりゃ 万事屋のじゃねえか あいつ 何しに来てんだ？」

「とにかく 入るぞ」

そのころ銀時たちは



「おい新八 これ調子のとてピンポンしないで入っちゃったせいかな？」

玄武族の兵たちに囲まれていた。

「マズイですよ銀さん……みなさんメツチャ怒ってますよ」

「みんな角生えてるアル！」

「お主らは何者だ？まさか あの事が外部に漏れたか」

「あの事？なに おたくら世間に見せることの出来ない事してんの？」

「……どうやら 何も知らない用だな お前らなんの用だ」

「ここにいる奴ら全員ぶつ殺しにきたアル！覚悟する…【ゴッ！】いっ！」

「バカヤロ！何 お前本当のこと言ってるんだ！」

「曲者だ！！殺れエエエエエ！！」

「ちょオオオオオオい！！銀さん みんな襲ってきたア！！」

「チッ……とりあえず…【ザッ】」

銀時は身構えた。

「逃げるぞオオオ!!」

「えエエエエエ!? ちょっと 戦うんじゃないんですか!?!」

「バカヤロー!いくらなんでも二日酔いの銀さんじゃ この人数相手はキツイっつーの!」

「銀ちゃん 根性無しネ!根性無い銀ちゃんは ただの天パーヨ!」

「お前天パー ナメんなよ!天パーはなあ 天パーはなあ……あれだよ…とにかくすげーんだよ天パーは!!」

「まったくすぐくねーよ!天パーに比べりゃ メガネの方がすげーよ!」

「いや それは無い」

「なんだよお前ら!!息ピッタリじゃねーか!!さっきまで言い争ってたじゃん!!」

「絶対に逃がすなアアア!!」

「キヤアアアア!!あの人たち 僕たち殺す気ですよ!!」

「とにかく 逃げるオ!!」

「あ! あいつら万事屋じゃねーか こんなところにいたよ」

「あら 本当でさあ 【ガシャコン】一発入れますか」

「いや待て 総悟 あいつら なんか追われてたぞ」

「……………」

「……………まあ 俺あ万事屋に借りがあるからな ……助けてやるか」

「俺もでさあ 結構万事屋の旦那に世話になってんでさあ」

「そついうと思ったぜ じゃあ 加勢に行くとするか」

そのころ城内監視室

「ほお……………あの娘……………懐かしい顔じゃのう……………惜しいのう……………ワシ  
が直々に成敗してやりたいのう……………」

『岩慶丸よ……………聞こえるか?』  
がんけいまる

「はっ……………豪菊王様……………」  
ごうきくおうさま

『主の申ししていた娘とは まさか あやつか?』

「左様で御座います」

『では あの白髪男の腰に差しているものが 妖刀“星碎”ほしくだきか』

「左様で……」

『ふむ……岩慶丸よ……』

「はっ！」

『主は武者修行中に一度敗れたと言ってたな』

「恥ずかしながら……」

『うむ ではチャンスをくれてやる 主が奴らを片付け 妖刀“星碎”を奪ってくるのだ どうだ？ 借りを返すと共に 名誉も得られるぞ 行く気になったか？』

「はっ！ 有難き幸せ……」

『では 行つてこい』

「はっ！！ （フハハ……良い機会が得られたものじゃ……妖刀“星碎”を奪ったら わしにこの世で敵<sup>かな</sup>う敵は居ない いくら“魔王”と恐れられた豪菊王でも 星<sup>アレ</sup>碎には敵わんだろう……）」

密かに悪巧みをする岩慶丸……。

そして、玄武族の兵たちに追われる銀時たち。

それを追いかける近藤・土方・沖田。

この後、一体どうなるか……。



よく考えたら俺の人生って空回りばかり（後書き）

『玄武族』・『岩慶丸』は、『銀魂コミック第五巻』の第35訓『慌てるな！ クーリングオフというものがある』で一度出てきました。

## どこの会社にも裏がある

城内を逃げ回り、拳句の果て追い詰められた万事屋一行。

「おいおい ヤバーんじゃねーの？」

「だからさっきまっすぐ行こうって言ったんだ僕はア！！」

「とにかく闘うしかないヨ 銀ちゃん」

「仕方ねえ やるか」

しかし、その瞬間。

【ドォォン】

と、爆発が起きて、多数の玄武族が瞬く間に吹っ飛んだ。

「なに！？」

「あ、あいつらは！」

「旦那ア 手伝いに来やしたぜえ」

「な！？なんでお前らがここに！？」

「何者だお主ら！？」

「オレたちか？オレたちや真選組だ」

「真選組だと！？幕府の犬が何故ここに！？」

「3人だと？フン 合わせても6人か… たった6人で何が出来る  
というのだ？構わん やってしまえ！！」

「うおおおお！」

【ザシュ！ズバ！バキ！】

「なんだこいつら！？やけに強いぞ！」

「たった6人にやられるな！いつせいに斬りかけれ！」

倒れても倒れても起き上がる玄武族。

それはまるで不死身の侍。

「くっ… 斬っても斬ってもきりがねえ！」

銀時たちが苦戦しているとき、玄武族たちの後ろから二人の大男が  
現れた。

「おお！やつと来たぞ！あの御二方が！」

「なんだあのバカでかいやつらは？」

二人を見た銀時は、ハッと何かに気付いた。

「！！ あれは…！！」



「天誅ううう！ 幕府の犬ども そして その侍ども そこにな  
おれ！我らが天罰を下してやる！」

「我らは 武を誇る傭兵部族 茶吉尼！そしてワシの名は鬼雲！」

「そして狼鬼！」

「おいおい どつかで見たことあると思ったら こいつら煉獄関の  
時の鬼野郎じゃねえか」

「たぶんそうですね…でもなんで 玄武族と茶吉尼が？」

「つべこべ言つてねーで 闘えテメーら！」

「くっそ！こんな数相手じゃ拉致があかねーよ！」

そのとき、鬼雲・狼鬼、二人の後ろから岩慶丸が現れた。

「ふははは！娘えお前はここで終わりだ！」

「！？ 誰アルか！？」

「ふはは 自分より弱い者は覚えとらんと言っておるのか？しかし  
それは星砕が有った為！ワシの手で潰したかったが、娘 お前は今  
ここで死んでもらおう」

「退け」

その時、鬼雲と狼鬼が動いた。

その自慢の金棒を振り回し、玄武族もろともぶっ飛ばす鬼雲。

「ぐぼえ！」

「ぎゃああああー！」

土方と競り合う玄武族が言った。

「お 鬼雲！！仲間に当たらないようにしろ！！」

「仲間？ワシは主らを仲間と思ったことは一度も無い。ワシらは豪菊王に忠実に従うだけだ」

「なんだと！？」

そのとき、狼鬼はその長槍で土方と競り合う男もろとも、土方を貫いた。

「ガは！」

「ぐあ！」

「トシイイ！！」

【ズボ】

「ゲホ！ゲホ！」

どうやら土方は急所は外れたようだった。

「フン どうやら命拾いしたようだな」

そして、鬼雲の金棒が新八に当たった。

「ぐはっ!!」

2、3人の玄武族を巻き添えにした後に当たったため、威力は半減していたが、それでも新八にはかなり堪えた。

「新八イイイ!!」

「神楽!新八を担いで逃げろ!」

「でも銀ちゃん私闘うヨ!」

「バカヤロー! 新八の容体が悪化したらどうすんだ!早く行け!」

「でも銀ちゃ...」

「早く行け!!」

「.....!!」

神楽は新八を担ぎ、思いっきり走った。

その時、岩慶丸が神楽の前に立ちふさがった。

「おっと 待て。ここを通りたいなら、わしを倒してから...」

「退くアルウウウ!!」

神楽の傘が火を噴いた。

【ズドドド!!】

「なに!?なんだ!?クソ!逃げた!」

神楽は出口を求め、走っていった。

「総悟!お前もトシを担いで行け!」

「…分かりました近藤さん…… どうか 死なないでくださいえ 旦那も……」

「おう」

【がしっ】

「……!」

そして、総悟も神楽たちを追いかけるように走っていった。

「待てえ!小僧!」

狼鬼が長槍を投げようとした。

「待て」

その時、近藤がその長槍をつかんだ。

「（……動かん）」

「これ以上俺の仲間に出したら この近藤勲がゆるさねえ」

近藤はパツと長槍を離した。

「フツ おもしろい……ではやってみるがいい」

「言うじゃねーかゴリラ オレもだよ 俺も仲間に出すヤツはゆるさねー！」

「いくぞ」

「おう」

二人はいつせいに斬りかかった。

そのころ、神楽に追いついた沖田。

「おいチャイナ てめーそのバカ力ぢからで壁ぶつ壊せ そっちの方が早い」

「…お前に言われなくなかったけど そんなこと言ってる場合じゃないネ」

「はやくしろい」

「ほあちやあああ!!」

【ドゴオオオン!!】

「よし 行くぞ」

そして、沖田・土方・神楽・新八は無事、城から抜け出した。

【ドオオ…ン】

「なんだ!？」

「ふっ あいつら上手く抜け出せたか？」

銀時が一瞬気を緩ませたその瞬間。

【ゴッ!】

「しまっ…!!」

「旦那あ!」

近藤も銀時に目をやった瞬間。

【ゴッ!】

「ぐあっ…!!」

【ドサッ ドシャッ】

「おい 殺すなよ こいつらを豪菊王様の下に持っていくんだ」

「ぬう つまらん」

「ん？ これは真剣じゃ！星碎ではない！！」

実は、神楽が木刀を持っていた。

そして、それに気付いた沖田が、銀時と別れ際に握手と見せかけ、自分の真剣を渡していた。

「ぬう やられた……まあいいわ そいつらは牢屋にぶち込んどけ」

「…承知」

【ガシャーン】

「イテテ……」

「やっと起きたか銀時」

「ゴリラ… ああ、そうか 俺立ち捕まったのか」

「どうやらそのようだ」

「……やっちゃった……！」

銀時は悔やむに悔やんだ。

そのころ、鬼雲・狼鬼は。

「狼鬼……いつまであいつに従うつもりだ？」

「ふん あいつも俺たちと同じ 星砕目当てだ 上手く利用すれば 星砕はワシらのものになる」

「そうか ならいいんだが あの男 ワシは気に食わないな」

そのころ岩慶丸は。

「申し訳ありません 星砕 を逃がしてしまいました。

「なんだと？」

「しかし その仲間は捕らえました 拷問でも何でもして 必ずや 居場所を聞き出します」

「早くしろ 時は一刻を争う 幕府の連中にばれてしまう前に」

「ハッ」



そして、神樂たちは病院に着いた。

どこの会社にも裏がある（後書き）

茶吉尼は、『銀魂コミック第六巻』の『第四十三訓 男はみんな口マントイスト』と『第四十四訓 刀じゃ斬れないものがある』で出てきました。

絶対に入ると言われると入りたくなるけど あれって何でなのかな

大江戸病院

【ウィーン】

「お 出てきた」

「先生 新八はどうですアルか？」

「ええ メガネの方はそこまでの傷ではありません。一週間入院すればほぼ完治するでしょう。しかし、真選組の方は命に別状はありませんが、肺を貫かれています。普通なら息絶えてもおかしくないのですが、奇跡的に…はい。完治するまで2ヶ月ほどかかります」

「2ヶ月……」

「新八は大丈夫アルネ？」

「先生エ 土方にとどめさしてくれって言ったじゃないですか」

「え？ いや 君何言ってるの？ あれ本気だったの？」

「新八はこの中ネ？」

「あ！ ちょっとまだ入らないで！」

「先生…俺はいったん帰るんで ヤツを頼みまさあ」

「ああ はい」

そして沖田はやや瞳孔開き気味で病院を後にし、真選組に帰った。

「新八元気か？」

「う…神楽ちゃん…そこ折れてるから…乗らないで…」

「気にすんなって お礼なんていらないヨ」

「お願い…どいて…」

「新八早く銀ちゃんのとこいこっヨ！」

「いや まだ無理だからね…」

「そんなこと言ってる と 銀ちゃん死んじゃうヨ ホラ【グイグイ】」

「イタタタタ！ホラじゃなくて神楽ちゃ…イタイ！イタ…【ゴキッギヤアアアアア！】」

新八の入院は2週間延期したらしい。

帰り途中の神楽。

「あゝあ 追い出されちゃったよ 定春うゝ新八も銀ちゃんもいないし これからどうするアルか」

「わうん……」

「助けに行きたいけど…… 銀ちゃんは必ず帰ってくるネ 私信じ  
るネ 定春も一緒に待つよネ？」

「わん！」

「よし 定春 家までダッシュね！」

「わん!!」

神楽と定春は、途中でベンチに座るグラスンを撥<sup>は</sup>ねたが、気にせず  
笑顔で帰った。

真選組屯所

今、沖田がちょうど戻ったところだった。

「わ！びっくりした 隊長お一人ですか？」

「あ 沖田隊長 もう戻ったんですか？」

屯所は荒れに荒れ、スナック菓子だらけに室温は17度、そして今まで隊士が隠し通してきた、ジャンプやピンク雑誌の山。

「どすか？隊長もここで一緒にくつろぎませんか？」

「いや……いい」

「沖田隊長？どうしたんですか？浮かない顔して……」

「なんでもねえ」

すると、少し隊士たちに不安の顔が出てきた。

「もしかして……局長たちの身に何かあったんですか？」

山崎の一言で、屯所内は静まり返った。

「……………寝るわ」

「ちょっと　ちょ……隊長！何とか言ってください隊長！局長たちはどこにいるんですか！」

「沖田隊長！隊長オオオオオ！！」

【パタン】

「（……………近藤さん……どうかご無事でいて下さえ……………）」

その日、沖田は不安な顔をして床に就いた。

神楽はそのころ…。

【ちच्चच्चちちち……】

聞こえるのは時計の音だけ。

いつもの騒がしい万事屋はそこには無く、神楽と定春だけその部屋にいた。

上に騒がしいのがいなくなると、お登勢<sup>とせ</sup>さんもキャサリンも何か異変に気付きだし、万事屋に上がってきた。

もう夕日が沈みそうだった。

「……銀時はどこだい？まったく……また無茶しに行ってるのかい？」

「ウン……でも すぐに帰ってくるヨ 銀ちゃんは！」

「そうかい……なんだかアタシはとても不安なんだがね……」

「な……何言ってるアルか！」

「才登勢サン 私モソウ思イマス アノヒトハ 簡単ニ死ヌ人ジャナイ」

「だれも死ぬとは言っていないだろ？ただ不安がするだけさ…家賃も滞納してるしねエ」

「任せるアル！帰ってこなかったら私が連れ戻してくるアル！」

「フン……じゃあ良いこと教えてやるよ」

「？ 何アルか？」

「お前らに依頼を頼んだ大男いただろ？アタシはあれが店の前を通ったとき 何か気になってたんだよ そしたらさっき思い出してね…… お前ら 玄武族の連中に手を出したんだろ？」

「！ 何でそれを？」

「お前らに依頼したあの男……かつて天人の“魔王”と呼ばれた兇悪なかなりの強者だよ アイツが玄武族のボスさ」

「な…マジでか！？」

「一人じゃ絶対になわなないよ 突っ込むのは勝手だが 死んじゃ元も子もないよ ……じゃあな」

【ガラララ…パタン】

「………… アイツが元凶だったなんて………… 銀ちゃん…無事アルか…………」

その日、神楽は不安な顔をしながら床に就いた。



そのころ、牢屋・拷問所では。

「オラ！さつさと吐いちまいな！」

【バチ！バチン！】

「グッ！…ガハ！」

「オラ！」

【バチイーン！】

銀時・近藤は拷問をかれこれ30分受け続けている。

「ぐアアア！！！」

【ガクン！】

「ふう……さつさと吐けばいいものを……」

そういつて、拷問吏しつもんじが部屋を出ようとしたときだった。

「銀時……！！？」

「待てよ……」

「！？」

「ふっ……もう終わりか？もつとキツイのが良かったなあ　僕は」

「…フン　後悔させてやろう」

【バチィ！ビシィ！】

「ゲホア！……ハア　ハア……俺たちはなあ……ぐア！！……ゲホ！  
…ハア　絶対エ誰にも斬ることのできねえもので繋がれてんだよ…  
…こんなところで　テメエらなんかにくたばってたまるかよ」

「口数の減らないヤツだな……」

「それは俺たちも同じだ　さあどうした？俺にはもう終わりか？これじゃお妙さんのパンチの方が効いてるぜ？」

「ならば　その口開かないようにしてやろう」

【ズバチィイン！！】

「そつだ　岩慶丸……万事屋だ」

「は？」

「万事屋に行け　あそこにならヤツの仲間もある　ならば星砕も一緒にあるっ」

「万事屋…ですか」

「時間は無いが 明日にしてくれ」

「しかし豪菊王様 明日は江戸で行事が行われる様で……派手なことも進入もなるべくなら避けた方がよろしいかと……」

「なに？こんなときに…仕方ない 明後日の明朝に行くんだ」

「は！」

そして夜が明けた。

誰かを護るために人は生きてる

朝早く、沖田総悟は刀鍛冶を営む鉄子のもとへきていた。

「どうでえ鉄子さん 昨日頼んだ俺の刀はできてるかい？」

「ああ あと少しだ 夕方までには完成するさ 今までで一番の出来になると思う 使い易さは保障する」

「ほう じゃちよいと見せてくれませんかね」

「ほら あとすこし磨きを入れれば完成だが…」

「これが……」

【スラッ…】

沖田が抜いたその刀、日の光に照らされ白く輝き、また日の光に照らされ赤く激しい炎の様に燃ゆる。

「その刀 艶が半端じゃないだろ？ 切れ味も抜群さ なんせ昨日からずっと磨き研ぎ続けていたのだからな 名前は“白炎龍”と言ったところだろう」

「白炎龍……なるほど その名の通り 真っ白だわ しかも切れ味は良さそうだ それに振りやすい このまま使っても良いぐらいだでもなんで白炎なんでえ？」

「その刀 少し向きを変えてみると良い」

「え？ うお！」

「どうだ？」

「すげーわ あんたやつばすげーよ 刀が燃えている様に見えまさあ」

「気に入ってくれたみたいで良かったよ」

「ありがとうございませあ じゃ 日が暮れたらまた来ますんで俺の刀お願いします」

「はいよ」

そして総悟は刀を鉄子に渡して歩いて刀鍛冶を去った。

まったく同じころ、万事屋の神楽は。

いつも新八に起こされなければ起きない神楽が、今日はとても珍しく自分で、しかも朝早く起きたのである。

「早く起きすぎたネ……やることが無いアル」

神楽は戸を閉め、また布団に潜った。

「……………」

「……………」  
「……………」

「うがアアアアア!!」

【ドオン】

神楽は戸を蹴り飛ばし、駆け足で銀時の部屋に行った。

【ドオン】

さらに戸を蹴り飛ばした。

「銀ちゃん帰ってこないじゃん! 何があったアルか! ? 銀ちゃんの身に何があったアルかアアアア! ! まってる銀ちゃん 今行くから」

神楽はバタバタと着替え、戦闘準備に入った。

「よし 行くか      定春 おいで」

「ワン」

そうして、神楽は万事屋の扉を開けた。

扉を開ける途中、神楽は玄関の前に誰かがいることに気付いた。

神楽は見たことがある服からスツと顔を上げていった。

そこにいたのは、沖田だった。

「うおっ」

「なにアルか？」

「チャイナ……お前これからどこへ行くつもりだア」

「お前には関係ないネ　そこ退くアル」

「ちょっと待て」

「何アルか　私は酢昆布買いに行くだけヨ」

「お前……あそこにいくつもりだろ」

「……だったらどうするアルか？止めるのか」

「やめとけ　死ににいく様なもんだぜイ」

「昨日から銀ちゃんが帰って来ないアル」

「俺もだ　近藤さんがあれつきり帰って来ねえ」

「じゃあお前もいくあるか？」

「お前はバカか　死ににいく様なもんだって言っただろ」

「…じゃあお前は銀ちゃんやゴリラを見殺しにするアルか？銀ちゃんもゴリラも私たちをかばったんだヨ！私たちをかばってまで闘ってるアルヨ！！たった二人でヨ！？もしかしたらもう……ぷっ」

その神楽の口を手で塞いだ沖田。

「それ以上言うな あのと二人はあんなやつらに殺られる人たちじゃねえ それは俺たちが一番わかっていなきやいけねえだろ」

「離すネ！そんなこと百も承知ネ！でもお前みたいに仲間を放っておけるほど私は馬鹿じゃないアル！」

「うるせイ だまれ」

「銀ちゃんたちの行動を無駄にする気アルか！？お前みたいに仲間を大事にできないヤツなんて そんなヤツに誰も護ることなんてできないアル！」

「だまれって言うてんだア！！」

【ビクッ！】

珍しく大声で怒鳴る沖田に神楽は驚いた。

「俺が仲間を大事にできないって？誰も護れないって！？ああそうかもしれない！！でもなあ 俺みたいなヤツを護ってくれる仲間として大事にしてくれる人がいるんだよ！お前もそうだよ！！その俺たちが死んでも誰もよろこばねーんだよ！！」

神楽はしばらく黙り込み俯いていた。



それを見た沖田は神楽に言った。

「……あいつらの……玄武族の強さは半端じゃないんだア　しかも茶吉尼も手駒としてる　認めたくねーが俺たちなんかが闘っても勝てる相手じゃねえ」

「…じゃあどうするアルか」

「理性を取り戻せ　落ち着いて考えろイ」

「……とりあえず中入るヨロシ」

「いいのかイ　いつも俺を嫌ってるガキ娘が」

「うるさいアル　仕方ないヨ！今闘えるのは私たちしかないネ！」

「あくまで闘う気か」

「他に手があるアルか？」

「いや　交渉しても絶対聞いてくれないだろーしなア　裏から忍び込んでみれば見つかるだろう　あそこの警備は江戸の大使館でも上のほうだからな」

「……なにアルか　お前も結局裏から忍び込むとか考えてたアルか」

「だが　ただぶつかりに行ってもやられるだけだ　それと　このことはあまり幕府には知られたくねえ　幕府が動きだしたらこんな苦勞しなくても簡単に事は済むんだが　そしたら俺たちの行動もバ

しる そしたら切腹もんだぜ」

「なんとか考えるアル」

「でも お前らなんで昨日あそこに？」

「……変な男に依頼受けたアル ペット玄武族に殺されたと言つて 敵を取ってくれ言われたアル」

「…そうか」

「まだ続きがあるアル その依頼した男 玄武族のボスだったネ」

「お前ら会ったのかイ！？よく生きて帰れて……」

「違うヨ！そのことはババアに聞いたアル」

「だがしかし なんでお前らに？」

「たぶん……あの 茶吉尼の後ろにいた玄武族のヤツネ あいつ前に私が持ってた銀ちゃんの木刀を欲しがってて……」

「……ま とりあえず この後どうするか話そう」

「ウン……」

神楽と総悟はそのあと作戦を考えた。

どれもボツだった。

そうしている間に昼過ぎになった。

「腹減ったアル……私 金持っていないヨ 新八が万事屋の金取り締まってるヨ お前何か買いに行けヨ」

「あいにく 俺ア 金は持ってねえんでイ」

「死ぬアル……」

「…チツ 仕方ねーなア ちよつと台所借りるぜ」

「ちょ 何する気アルか？」

「俺が何か作ってやる」

「え!？」

「安心しろイ 俺も早くから親を亡くしてるんでイ 少しは料理はできらア」

その言葉の通り、沖田はたんと料理をしていく。

その後姿を神楽はボーっと見ていた。

そうしていると、神楽は自分の異変に気づいた。

「（何で私アイツを家に入れてるアルか？なんで親しげに話してるアルか？なんで料理してもらってるアルか？なんで……熱いアルか？）」

その時、沖田が料理を持ってきた。

「ほらできたぜ」

「おお」

意外に美味そうだった。

「あんな食材で よく作れたアルなあ」

「美味いかどうかは保障できねエが……どうだ？」

【パク】

「ん……さすがに美味くないネ」

「そうか」

「でも……今日はアリガトネ」

「？」

沖田は少し驚いた。

神楽も俺にそんな事を言うのか。

そんな顔をするのか。

そう思った。

「これ食べたら また作戦考えるアルヨ」

「わかってらァ」

そうして二人はペロつと食した。

そしてしばらく寝転がった。

「ゲフツ そういえば お前なんで刀持ってないアルか？」

「ゲフツ あ？ ああ そうか だからお前旦那の木刀持ってきたのか」

「さっきの事アルか？」

「ああ 俺がなんで刀もってないかって？旦那に俺の刀を貸したからだよ」

「マジでか！？」

「おかげさまで一本無くしちゃったよ」

「無くしたって決め付けるなヨ！銀ちゃんは大ぶん　まだお前の刀  
持つてるネ！」

「それならいいが　まあどうせあの刀はもう必要ねエんでイ」

「どうしてアルか？」

「昨日帰ってから　こっそり刀鍛冶のところに行って新しい刀を用  
意してくれるように頼んだんでイ　そして今朝ここに来る前に行っ  
たら夕方にできるってさ」

「お前……」

「ハハ……実は俺もお前と同じ　闘う気だったんでイ」

「……やっぱりお前気に食わないアル」

「え？」

「自分ばかり……　自分一人で考えて　自分だけそんなに頑張っ  
て……　カッコつけようとしても　そうはいかないアル！私も仲間  
に入れるアル……」

「……なに偉そうな事言ってたア　クソガキが……　俺たちはも  
う仲間だろ？」

そう言われた神楽は、ニツと笑った。

「お前にガキ言われたくないアル！」

「こつちこそだ」

「もう 夕方ネ そろそろそこに行くヨロシ でも私も着いていく  
アルヨ 着くころにはもう日は沈んでるヨ」

「おう」

「行くヨ定春」

「わん」

二人と一匹は万事屋を出た。

そして沖田の刀のある刀鍛冶へと向かった。

そのころ銀時たちは。

「あーいてえ」

「まったくだ 俺なんか一発 シタマに当たったぞ」

「え？銀魂？」

二人は元気そうだった。

神楽たちが歩いていると、子供たちが普段より多いことに気づいた。

「今日なんかあるアルか？」

「ああ 今日祭りだな」

神楽が定春から飛び降りた。

「祭りアルか！？マジでか！！新八のバカヤロー！金お前が持つてんだろーがア！！」

「行くぜエ」

「……」

神楽はシヨボクれながら定春に乗った。

日が暮れかけたころ、神楽と沖田は刀鍛冶に着いた。

「あ 沖田さん ちょうどできましたよ！」

神楽は入り口で待っていた。

「おお」

【スッ……】



「うお！さらに軽くなったような……」

「それなら岩でも何でも切れるさ」

「ありがとうございまさあ 感謝するぜ」

「これからどこへ？」

「ああ うちの局長を迎えに行くだけよ」

そうして沖田は刀鍛冶から出た。

「できたアルか？」

「ホレ」

「じゃ 行くアルか？」

「だれが行くって言った？とりあえず また明日だ 朝早く行くから起きてろよ」

「もちろん」

「じゃな」

「ウン」

そうして二人は別れた。

沖田が人混み見えなくなるまで神楽はその背中を見ていた。

「……………帰ろっか定春！」

「わん！」

神楽は万事屋に帰った。

そして夜が明けた。

「昨日以来 姉上も神楽ちゃんも誰も見舞いに来ねーよ チクシヨ  
ー！！！」

「おい 静かにしろ 眠れねーよ」

「土方さん！大丈夫なんですか？」

「ああ……………」

「そういえば 土方さんも誰も見舞いに来てないですね……………」

「……………」

そのあと二人は、ため息をついて布団にもぐった。

チョコレートパフェより甘いものなんてない

神楽は朝早くから超頑張って起きて、沖田を待っていた。

時間は刻々と過ぎていく。

神楽は早く起きすぎたと思ってはいたが、もう巳みの刻を過ぎようとしていた。（巳の刻：現在の午前8時くらい）

「おつそいアルネ……朝早く来るって言ったから超早く起きたのに  
アイツ来たらぶっ殺すネ」

神楽はイライラしながら待っていた。

「そもそも何であいつの言うとおりにしてるアルか私 バカらしい  
ネ 寝てよかな」

そのときだった。

『ピンポーン』

万事屋のインターホンが鳴った。

神楽が走る。

「おせエエエ！！女心もてあそを弄もんでそんなに楽しいかアアアアア！ボケ  
エエエ！」

神楽は玄関に怒涛の跳び膝蹴りをぶっ放した。

【ドガシャアーン！】

「ゲホッゲホッ ふははは やるな娘」

「…… すんません間違えました」

「待て」

「おっと お前一昨日のやつアルな 銀ちゃんどこにやった？教えないとその角へし折るぞ」

「わしは知らんな わしの目的はただひとつ その妖刀星砕のみ」

「何を勘違いしてるか知らんけど これは銀ちゃんが修学旅行で行った洞爺湖で買ったただの木刀ヨ！」

「隠しても無駄というもの この前手を合わせた時のことを忘れたか」

「この前って私はこの刀で何かしたアルか？」

「一振りで橋を両断するその力 まさしく星砕 わしの思った通りだった」

「ちがうネ！あの時は私の力で……」

「その細い腕のどこにそんな力があるという？それにその衝撃に何故その刀が耐えられる？ホレ理由を言ってみい ん？何故だ？違うというのなら言えるのだろう？」

「ぐっ…」

「それが星砕の証拠だ」

岩慶丸が神楽に襲いかかろうとした時だった。

「まてえ！」

【ガキーン！】

岩慶丸はすかさず剣を抜き受け止めた。

「ぬう！」

岩慶丸に斬りかかったのは沖田だった。

「こりや何事でえ」

沖田が周りを見渡す。

「遅いアル！何してたアルか！」

「ワリイ 寝坊だ」

「あー？てめえ 自分で早く起きろ言っときながらそれアルか？  
自分で言っときながら寝坊アルか？いい身分だな コルア」

「あー？悪かったって言ってんのになんだそりゃ こちとら てめえと別れて帰ってから バカ隊士たちの相手してて疲れてんでイ

「扱い使えよコルア」

「何をもめてるか知らんが この前は油断したのみ 今ならわしが負けることもなかるう クソガキが二人になったところでどうも変わらんわ」

「あゝ！！？？」

「だれがガキじゃあ しかもガキの前にクソ付けやがったなア こいつはともかく オレア違エーぞ」

「んだコルア やんのかオウ？」

「早速仲間割れか わしはガキの喧嘩を黙ってみていられる大人ではないのでな」

【シャツ】

「！！」

【ガキーン！】

岩慶丸が振り下ろした剣に沖田が刀で耐えた。

【ギチギチ】

「ほう なかなかの反射神経じゃないか」

「いきなり襲ってくるのは大人がすることかい」

「わしと闘うつもりか 無駄だわしの体はそこらのクリスタルよりも硬い」

「へえ そこまで硬いんだったら 俺の刀で試<sup>ため</sup>【ドゴッ】しぐア！」

「ぬぐお！」

【ドゴオン】

沖田と岩慶丸は神楽の蹴りで2階の万事屋から下に落ちた。

「一人で戦おうとしてんじゃないヨ 私にも殺らせるオオオ！」

神楽が飛び降りてきた。

【スタツ】

「そいつは私の相手ネ 手出すんじゃないヨ」

「強がってんじゃないーガキが 前にやられかけたって聞いたぞ」

「んなこと誰に聞いたんじゃない ワレエー！」

「お前んとこのワン公」

「犬と会話できるのかテーマは！」

「あら言っ てなかったけか そりやすまねえ 俺は動物と話すことがきんだ」

「何者アルか お前エ!!」

「悪いがガキと一緒に遊んでいる暇はない」

岩慶丸は神楽に向かって跳んだ。

「だからガキじゃねーって」

【ドッ!】

神楽は岩慶丸を蹴り上げた。

「グハア! (だがぬるいわ この程度で )」

「言ってんだろオオオ!!」

「(何だとオオ!? あの一瞬でわしの上にイイイイ!? )」

「らアアアア!!」

「(予想外だった だがやはり甘い その刀でわしを斬ろうというのが間違っている)」

「らアアアア!!」

昨日 刀鍛冶にて。



「ありがとございませあ 感謝するぜ」

「これからどこへ？」

「ああ うちの局長を迎えに行くだけよ」

「じゃあ その刀……」

「あ？」

「その刀をもって行く前に 約束してくれ」

「なんでえ？」

「白炎龍<sup>そいつ</sup>で人を斬るときは誰かを護るときにだけにしてくれ」

「…と言いますと？」

「私の刀のモットーは “護る剣” なんだ」

「……へっ わかったよ…… 鉄子さん あんた良いモノ持つてん  
じゃなーか」

「え？」

「じゃーな 感謝してるぜ」

「（鉄子さん……俺は今誰かを護るってわけじゃねえ だけど……）」

「？」

「！？何してるアルか！？」

「ウラァ！」

沖田は刀をしまい、そのまま空中で体を反転させて蹴りをかました。

【ガン！】

「甘い！」

【ザッ！】

岩慶丸はすぐに体勢を直し、落ちてくる沖田に斬りかかるうとした。

【ゴッ！】

そこを神楽が足払いをした。

「何が甘いだ！お前は銀ちゃんか！」

【ドサッ】

「【ドサッ】っ……助かったぜ チャイ【ガン！】なァー！」

神樂が沖田に向かって石を投げた。

「テメーはテメーでなんで止めささねーんじゃボケエー!!」

「……（こんなヤツにいえた義理か!!）」

「やはり人間は甘いヤツばかりだな　その甘さが命取りだ」

「情がないヤツよりましネ！」

「わしに情をかけたというのか？それが命取りだと言っとな　ちな  
みに教えてやろう　あの二人はわしらに捕まった」

「!？」

「なに言ってやがる　お前」

「もうすぐ死刑にされるだろ」

「「ピクッ!」」

その言葉に神樂と沖田は反応した。

「銀ちゃんが…？」

「近藤さんが…？」

「「死刑?」」

「安心せい　主らもすぐにあいつらのところに逝かせてやる」

「銀ちゃん返すアルウウウ!!」

【バゴオ ドゴツ ズドド!】

神楽のパンチとキックが交互に炸裂。

「グアアア!! (なんだこの力は!? 人間のものじゃ… ってアレ? あのと透き通るような白い肌 そしてあの傘…… 夜兔オオ! あれ夜兔だアア! あれ? じゃああの刀本当に星砕じゃないの!?)」

「うらあああ!」

神楽がさらに殴りかかろうとしたその時だった。

「待て」

沖田がそれを制した。

「俺に任せろ」

「オイ ちょ」

「任せろって言うてんだ ちったあ信用しろ」

「なんだ またお前か」

「(鉄子さん 俺は今護るもんができたぜ)」

「その刀でわしを斬れるものか」

岩慶丸は腕で身を護った。

「甘え……お前こそ チョコレートパフェより甘エエエエ!!」

【ザンッ!!】

「かつ……!!」

岩慶丸はうつ伏せに倒れた。

【ドサ!】

「うおお!というか銀ちゃんみたいなこと言ってんじゃねーよ」

「……おい 行くぞチャイナ」

「お前なにアルかその刀!カッケー!」

「早く行かねーと あの二人死刑にされるぜ」

「何してるアルか 早く来るアル!」

神楽はいつの間にか沖田の前にいた。

「……まったく ガキが……【ズキッ】ぐっ……」

沖田は自分の足を見た。

「…チッ (足挫いちまった さっきの蹴りと着地のときだな……)」

「オイ！早くするアル！」

沖田は平然と歩いていった。

風邪の時は首の周りにネギを巻け！っていうけど 全然治らねーじゃねエか噓つき

大江戸病院

「土方さん 暇ですね」

「……………」

「あれ？寝てるんですか？起きてますよね？土方さん」

「うるせーよ 寝むれねエじゃねエか」

「………… 早く治るといいですね」

「んだ てめえコラ 情けでもかけようってか お前こんな怪我す  
ぐに治してや………… 【ピキッ！】グオア！！」

「ああ！まだ無理しちゃいけませんって！ちょ 大丈夫ですか！？」

「おおお 俺は しし 真選組 ふふふふ 副長 ひっひひ 土方  
とととと十四郎だだだ」

「土方さんが壊れたアアア！ちょ 大変だアアア！土方さんが！  
土方さんが！」

新八が騒いでいると、隣のベッドの男が起き上がった。

「うるせーなあ 眠れねーだろ」

「あ すいませ……あ！」

「あ！お前は万事屋のー！」

「長谷川さん！どうしたんですかそれ！しかもまた同室だし……」

「おうよ それなんだが お宅のお嬢ちゃんとワンちゃんがコレ  
なんか人をいきなり轢いてきたのよ」

「神楽ちゃんですか……」

「まったくよ……俺がパチンコで負けた矢先にこれだからな……」

「またパチンコですか もう止めたらどうですか せっかくのお金  
もみんなパーにするだけでしょ」

「わかってるよそんなこと……でもな 何故か俺の体がパチンコを  
求めるんだ だがいつも負ける ククク…それに最近気づいたこと  
もあるんだ」

「なんですか？」

「“負”<sup>マ</sup>けて初めて“ダ”メだと気付く“オ”トコ……マダオだっ  
てことをさ」

新八は目をそらした。

「イテテ……あれ？ちょ コレ ヤベッ 動けな……【ビキキッ！】  
あゝっ！……！」



「え？どうしたんですか？土方さん」

「ちょ アバラがなんか……ゴエ！」

「ぎゃああああ！血吐いた！土方さん！ちょ 誰か！誰かア！」

「ナースコールだ！ボタン押せ！」

「は はい！」

大江戸病院は朝から大騒ぎだった。

そのころ神楽・沖田はすでに玄武族の城（大使館）に着いていた。

「あ！門が直ってるアル！」

「やっぱりお前がこの門壊したのか」

「モチロンヨ」

「さて……これから近藤さんと旦那を救出に行くぜエ」

「死に行くようなものじゃなかったアルか？」

「まあ そんなこと言ってられないだろイ あの人が死んじゃま  
つてからじゃ遅いからな」

「お前 死ぬことしか話<sup>はな</sup>してないアル そんな話して何が楽しいアルか ポジティブヨ ポジティブ精神が大切って銀ちゃん言ってたヨ ネガティブなこと考えてたらいつか本当に死ぬアル」

「そうかい 俺ア いの一番にお前に死んでもらいたいかな」

「オイコルア さっきまでとは一変してそれかア やんのかコラ！」

「……………」

「おい……………」

「何があっても俺とはぐれるなよ それとこんなことも今回だけだぞ」

「わかってるアルよ」

「（くそ………… ストレスのせいか 自分の感情がコントロールできなくなつてらア 何よりも体が鉛のようにダリイ…………）」

「（………… やっぱり 最近のコイツおかしいアル…………）」

神楽は思い切つて聞いてみた。

「どうしたアルか 最近お前変アルよ 体調でも悪いアルか？」

「………… 俺の心配するんじゃないエ お前に情はかけられたくねえ」

「やっぱり どうか悪いアルな………… 顔赤いヨ」

「（……まさかとは思ってたが やはり風邪だったか……ヤツらバカ隊士たちの世話役がこんなに大変なア思わなかったぜ 近藤さんも土方のヤローも毎日あんなことやっていたのか……早く助けださねエと あの人がいなくなったら真選組はダメになっちまう）」

「風邪なら首の周りにネギ巻くと意外に治るアルよ」

「バカヤロー ありや迷信だ」

「帰るアルか？」

「バカ言っじゃねエ それじゃ近藤さんたちが……」

「少し休もうヨ それじゃ本当に死ぬアルよ」

「情をかけるなって言ったらイ 行くぞ」

「待つアル！少し休んだほうがいいアル！」

沖田は歩いて修復された門を開けた。

「倒れても知らないアルよ！」

「倒れねーよ」

沖田はこの時点で、足を捻挫・風邪・ストレス・重責などで体も精神もボロボロだった。

少し歩いただけで息遣いが荒くなる沖田を、神楽は心配そうに見ていた。

入り口の門を開けると、早速玄武続の隊士が待ち伏せをしていた。

「なにヤツ!」

「お前らは……この前のヤツだな?今ここで成敗してくれる!」

「まったく天人は同じ顔ばっかで気持ち悪いぜ……そこをどけ  
たちはテメエらなんかにはねエ」

「ふん 二人で何ができると言うのだ」

「待て 侮<sup>あなご</sup>るな この二人は尋常じゃない強さだぞ」

「チャイナ 俺ア今 体動かしたくねーんだ 頼んだ」

「頼まれたらなんでもやるのが万事屋ネ 任せな」

「小娘一人だと?コケにしゃがって……殺<sup>や</sup>れエ!」

玄武族が大勢で襲ってきた。

「ほあちやああああ!」

【ドゴゴゴ!ズド!】

「邪魔アルウウウ!」

【ズドドドドドド!】

「グア！」

「ギャア！」

神楽は次々と玄武族を倒していった。

「今度は手加減しないアルよオオオオ！！」

5分もしないうちに、数十人の玄武族を倒してしまった。

「ほ……」

「こいつぁ すごいや」

沖田の言葉に神楽は驚いた。

「え！？」

「こいつだけ角が二個あらア 新種か？」

「……………何してるアルか 先行くアルヨ」

神楽は歩いて行った。

しかし沖田が着いて来ないのに気付いた。

「どうしたアル？」

「あ ああ すまねエ」

沖田はフラフラ歩いていった。

「本当に大丈夫アルか？」

「大丈夫でイ」

「ぜんぜん大丈夫そうじゃないアルよ」

「俺の心配ばかりするな それより助かったぜ」

「……足手まといに感謝されても嬉しくないアル 動けないなら外で待つてるヨロシ」

神楽は前に進んだ。

沖田も負けじと歩いた。

足が痛いそぶりなどしないで。

「……借りは絶対<sup>ぜい</sup>エ返す」

神楽が倒した玄武族はあれが全員らしく、その後の戦闘は一切なかった。

「……不気味だな…あれから誰も襲ってこねエ」

「私に恐れたアルよ！男はみんなビビリネ！」

「はぁ……ガキは元気でいいよなア」

その時だった。

前から二人の大男が現れた。

「こんなところに居たか」

「ん？お前らがここに居るということは岩慶丸は死んだか？」

この前の茶吉尼の、狼鬼・鬼雲だ。

「あの玄武族なら俺が倒したぜ」

「そうか それは良かった」

「なに？」

「あの男は邪魔だったのにな わしらが手を汚さずに済んだわ」

「お前ら仲間だったんじゃないアルか！？」

「仲間？フハハ 笑わせるな そんなものわしらに必要ない」

「わしらには 力と金さえあれば他に何もいらん」

「最低なヤツらだな……」

「さて そこの小娘の腰にあるものが妖刀か」

「狼鬼 一発で仕留めるぞ」

「御意」

「今度ばかりは見てられねエな 俺も闘つぜ」

「無理すんなヨ」

「へっ 大丈夫だ」

「鬼雲 参る！」

「狼鬼 参る！」

狼鬼の槍が壁を貫く。

【ズドオン！】

鬼雲の金棒が城を壊していく。

【ドゴオオン！】

神楽と沖田の死闘が今始まった。



昔話に出てくる鬼はほとんど鬼に金棒

玄武族城内牢獄

【ドオオン！】

「何だこの音は！？テロか！？」

「いや……違うな恐らくこの音は あいつらだろうっよ」

「トシたちか！？」

「ハッ 情けねーなア 結局このまま俺たちが足手まといになっ  
んじゃあ あいつらに合わせる顔がねーぜ？」

「そうだなア」

「このままここで だまゝって二人仲良くジッと待ってても仕方ね  
エ おいゴリラ やることはわかってんだろーなあ」

「おっよ」

「「せ」の」「

【デゴロン！】

そのころ神楽たちは茶吉尼相手に好戦していた。

「うりゃあアアアア！」

【ドガン！】

「だアアアア！」

【ガキン！】

「銀ちゃんを……」

「近藤さんを……」

「返せエエエエ……！」

【ドオオン！】

「くっ……！（疾<sup>はや</sup>い！剣筋が読めん！）」

「（でたらめだが この夜鬼の小娘強い……！）」

鬼雲と狼鬼は顔をあわせた。

「ここじゃ分が悪い 悔しいが行くぞ」

「うむ」

二人は走っていった。

「待て！」

「追いかけるアル！」

鬼雲・狼鬼を追って神楽と沖田も走り出した。

しかし。

「ぐアっ……！」

沖田はその場に倒れこんだ。

「どうしたアルか！？」

「いや なんでもない こけただけだ……痛っ！」

「足 見せるアル」

「おい よせ……黙れヨ」【ガン】イテ！」

神楽は沖田の足を見て驚いた。

「すごい腫れてるアル！それどうしたネ！？何時からアルか！？ずつと我慢してたアルか！？」

「大丈夫だ 行くぜ」

沖田はスタスタ歩いていった。

その歩き方は、異常だった。

「お前……」

「気にすんなってエ さつさと来い」

「……本当に何が起こっても知らないアルよ!!」

しばらく時間をかけて階段を上ると、扉がひとつあった。

「さつきからまっすぐの道だったからここか……」

「待ち伏せしているかもしれないネ」

「いや 近藤さんと旦那を人質にしてるかも知れねエ」

「どっちにしろ やることはひとつヨ」

「わかってんなら早いぜ……」

【ドゴォー!】

神楽は扉を蹴り飛ばした。

「「ぶっ殺ス」」

二人が怒っているのには理由があった。

鬼雲たちが逃げる数分前」。

「おぬしら なぜまたここに来た!？」

「銀ちゃん助けるためアル」

「こんな力でか?フン 笑わせてくれる」

「悪いが お前ら何か相手にしてられないんでエ 俺たちは魔王を  
倒し 近藤さんたちを助ける 退けよ」

「…ククク 馬鹿なヤツらめ…」

「なんだと?」

「やつらは処刑された」

「嘘をつくんじゃないエ」

「嘘だと思うのなら コレを見る」

鬼雲は懷から血がついた銀時の羽織の切れ端を出した。

「「!」」

「ああ あとこんなものも持ってきた」

狼鬼が取り出したのは、腕だった。

「こっちはゴリラのだったな」

当然、それは近藤の物ではなかった。

しかし、鬼雲・狼鬼の行動は二人の逆鱗に触れてしまった。

「返せ……」

「ん？」

「銀ちゃんを……」

「近藤さんを……」

「返せエエエエ！！」

神楽と沖田の最終決戦が始まった。

神楽が蹴り飛ばした扉の中には、鬼雲と狼鬼ともう一人いた。

「フン 来たか」

「ここでも楽に動けると言っもの」

「そしてこの方が魔王と称される　豪菊王様だ」

魔王と呼ばれるにも納得というぐらいの体の大きさで、3メートルほどあった。

「ハハ…笑っちまうな　デカすぎだぜ」

「お主ら　ここに何をしに来た？」

「近藤さんたちを助けに来たつもりだったが今は違う……お前らをぶっ殺しにきた」

「フハハハ　なかなか息の良い小僧だ　鬼雲　狼鬼　任せたぞ」

「御意（鬼雲：約束通りあの小娘を先に倒した方が星砕を手に入れるという事でいいんだな）」

「うむ　行くぞ！」

鬼雲と狼鬼は一斉に神楽に飛び掛った。

「（しまった！ヤツらはチャイナの木刀しか目に入ってねエ！！）」

「うお！」

神楽は上に跳んで避けた。

「かかった！」

魔王が金棒を振り上げていた。

「誰が闘いを放棄すると言った？」

「!?!」

「ヌン！」

神楽はとっさに天井に捕まりなんとかしのぎ、下に降りた。

「危なかったヨ」

「チャイナ 俺があのだ二人をやる お前はあの魔王だ」

「…わかったアル」

神楽と沖田は左右に走った。

沖田は足を半ば引きずって。

「うおおお！」

「ヌウ！」

【ガキーン】

「鬼雲悪いな 俺は小娘の相手をしてくる」

「狼鬼イイイイ！」

沖田の眼が狼鬼の後姿を捉えた。



「逃がさねエ」

一瞬だった。

いつの間にか沖田は狼鬼を斬っていた。

【ズウン！】

「なに！？（なんだこのガキ……動きがまったく見えなかった！！  
ワシと対峙していたあの状態からそんな……ありえん！！）」

「あんま体が持ちそーにねエんだ さっさとケリをつけるぜ」

「ぐ……オオオオ！」

「死ね」

【ズバン！】

「グアアア！」

【ドスウン！】

「ハア ハア ハア」

沖田は片膝を着いた。

「痛ってエ 足……終わったな」

神楽と魔王はほぼ互角に対峙していた。

「ふんがああああ!!」

神楽が金棒を持ち上げる。

「ん?どうした?夜兔の力はこんなものか?」

「ぬおおおお!!」

「フン!」

魔王は金棒を上げた。

「!!」

それと同時に魔王の拳が神楽に直撃した。

【ドゲッ!】

「グア!」

【ドオオン!】

魔王はその体に似合わず素早かった。

魔王は神楽を殴ったと同時に地を蹴り、神楽に襲い掛かった。

「チャイナ!」

「まず一匹」

魔王は金棒を振り下ろした。

「……………ん？」

神楽が目を開けると、そこには金棒を刀一本で耐えている沖田がいた。

「お お前!!」

「チャイナ………… お前は俺が絶対エ護る 絶対エ死なせねエ!」

## 家に帰るまでが遠足　生きて帰るまでが戦（前書き）

読者の皆さん、これまで本当にすみませんでした！

先日、自家用PCが故障、原因もわからず長期放置してしまいました。そのため長期にわたり投稿する事ができず、もしも楽しみにしていた方に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

これからそんなこともあるかも知れませんが、その度お詫びをさせていただきます・・・。

家に帰るまでが遠足　生きて帰るまでが戦

「チャイナ……お前は俺が絶対エ護る」

「お前……！」

「絶対エ死なせねエ　例え……この体が引き裂かれても　足をもがれても　この腕が　この刀がある限り　お前は俺が必ず護ってやる　！！もう誰も触れさせねエ　これ以上　俺の目の前でお前が傷つくのは見たくねエ」

「……！　な……なに言ってるアルか！もう止めるアル！私はまだ動けるから！無茶しないでヨ！もう体ボロボロじゃ　」

「しらねーよ　んなこたア！　だがなあ　目の前で傷ついていくお前を　惚れた女を護れないんじゃないじゃあ俺は男として失格なんだよ」

「えっ！？」

「何をゴチャゴチャと……フン！」

魔王の鉄拳が沖田にモロに当たった。

【ドゴッー！】

「ぐおエー！」

「……！」

【ドゴォン！】

「がはっ！」

「ああ！」

神楽は沖田に駆け寄った。

「大丈夫アルか！？しっかりするアル！」

「ゲホッゲホッ！油断…大敵…ってか…情けねー…結局俺は役立たずだったな……ごエ！」

「！！おい！しっかりするアル！おい！」

「ハー ハー… やつべえ…意識が… チクシヨオ…馬鹿だな俺ア…最期は…こんな形になるなんてな…」

「なに言ってるアルか！しっかりするアル！」

「魔王相手にお前一人あいつで勝てるのかよ…言つたろ 死に行く様なもんだってさア…ゲホッ まあ言つた本人がコレじゃあな…」

「…大丈夫ネ」

「…？」

「今度は私が護るヨ ……つらいんだもん 私の好きな人がこれ以上傷つくのを見てるのは…とつてもつらいネ だつてお前は本当は強いのに こんなやつらに負けるヤツじゃないのに」

神楽は少し涙ぐみながら言った。

「……バーカ お前があいつに勝てるかよ…… さっさと涙拭いて  
逃げるよ」

「逃げないヨ だって逃げたら私は女として失格ヨ また……一緒に  
遊びたいから」

「……どうやら それは無理らしいぜ」

魔王は自慢の金棒を振り上げた。

神楽は沖田の前に立ち塞がった。

その時。

【ドゴオオン!!】

「うおおおお!!」

「な なんだ!？」

沖田と神楽は目を丸くして驚いた。

「銀ちゃん!!」

「こ…近藤さん……!」

「何だお前ら ワシの相手をしに来たのか 茶吉尼も倒せんかった

ヤツらが束になったところで　ワシの相手になるものか……」

「神楽　洞爺湖貸せ！」

「総悟　刀を貸せ！」

「あ……はい！銀ちゃん！」

「（護る剣……）近藤さん！」

【パシ！】

「魔王だかなんだかしらねーがなアアア……」

「俺たちの仲間に出すやつはなアアア……」

「「絶対エ許さねエエエエ……」」

「ぬおオオオオ……」

魔王の振り降ろした金棒より疾く、<sup>はや</sup>銀時と近藤の刀が魔王をぶった斬った。

【ブシイイ！】

「なんだと……ゴハッ！あ……ありえん……このワシが……魔王と呼ばれた……このワシが……この様な……人間なんぞに……くぞお  
おお……！！」

【ズウ……ン】



「総悟！どうしたその様は！？大丈夫か！？」

「待たせたな神楽 悪かったなこんなところまで来させて」

「トシや新八君はどこだ？まさか…」

「…違いまさア あの二人は大怪我で動けねーから置いてきやした」

「神楽とお前 二人だけで来たのか！？」

「そうだヨ 銀ちゃんたちが心配だったから私たち二人で来たん  
」

【パン！】

沖田と神楽は一瞬なにがあつたかわからなくなった。

近藤と銀時が二人の頬にビンタをしていた。

「バカヤロー！あの時どんな思いで俺たちがお前らを逃がしたと思  
つてんだ！」

「助けに来るなんて思っちゃいなかったぜ俺たちは 実際こうやつ  
て簡単に出れたしな」

「なんだヨ！銀ちゃんたち 嬉しくないの！？」

「……無茶して欲しくなかったただけだ ありがとな神楽」

「すまなかつたな総悟」

「……………」

「ほら さつさと行くぞ」

「さあ 帰ろう!」

4人は並んで帰った。

「あ でもコレどうするんでエ 近藤さん」

「え?」

「そういや お前ら怪しい動きしてたからって来たんだよね?」

「これじゃ真選組と私たちが怪しい動きしたヤツらネ」

「あー 松平のつつぁんになに言われるか…近藤さん」

「いや 幕府からだろ ゴリラ」

「男は黙って切腹ヨ ゴリラ」

「ちよっ ちよっ なに?全部俺の責任か?」

「当たり前だろ なんだって局長だからな」

「先陣切ってたヨ!」

「近藤さん 葬式はパアツとやりますんで 安心してくださいせエ」

「総悟まで何を… 嫌だよダヤダ！嫌だアアア！俺はまだ死にたくないイイイ！どうせ殺されるならお妙さんに殺されたいイイイイ  
！！」

この後、松平のつつあんのところに行った近藤は事情を説明した後、命の危機にさらされたが、お登勢や神楽などの証言でなんとか松平のつつあんが幕府おかみに話をつけてくれて、首の皮一枚のところ  
で助かった。

今回の一件で、真選組は副長の土方が長期の入院、沖田が足を全治  
2ヶ月のヒビで長期の自宅安静。

万事屋では、新八が全治1ヶ月で入院、神楽が軽い怪我で全治2日。  
万事屋にとっても真選組にとっても、かなりの痛手だった。

ただ、この事件の後、あるプチ事件が起こるのである。

家に帰るまでが遠足　生きて帰るまでが戦（後書き）

かくして、今回の『銀魂　魔王襲来篇』は終わりました。

ここまで読んでくださった方には感謝の気持ちでいっぱいです！

ありがとうございました。

えー、そして次は『魔王襲来篇』のオマケの様なものなので、グタグタな感じでキャラ崩壊している感じです。それでも見ても良いかな…と思う方は、この次を！

期待はしない方が良いでしょう……、w、

## 遠いものほど愛しい（前書き）

ここからは、神ノ沖が中心の物語。  
単数話で編成される作品です。  
果たしてどんな結果が待つのか？

遠いものほど愛しい

大江戸病院

神楽と銀時は、新八の見舞いに大江戸病院を訪れていた。

「新八ー！元氣アルか？」

そこにはベッドで寝ている新八とその姉、お妙が一緒にいた。

「あら 神楽ちゃん来たの それに銀さんも」

「新八は？」

「今は寝てるわよ さっきまで起きてたんだけどね よっぽど疲れ  
てたのかしら 私が作ってきた栄養たっぷりの料理食べたらすぐに  
眠っちゃって あ そうだ 私新しい料理にチャレンジしてみたの  
ゝ それを新ちゃんに食べさせてあげただけだコレ どう？神  
楽ちゃん達も食べるわよね？」

よく見ると、新八は口から泡を吹いていた。

それを見た銀時と神楽はこの超暗黒物質的物体を食べたら新八のよ  
うに死んでしまうことを察した。

「いや 俺はもう食べてきたから遠慮するわ！」

「あらあ 残念だわあ 神楽ちゃんは？」

「私もアル！食べ過ぎたアル！！」

「神楽ちゃんも？せっかく作ってきたのに……」

「そうだ 勿体無いからお前が食べたらどうだ？」

「え？私？」

「そ そうアル！姉御 新八の看病で疲れてるヨ！」

「私はいいわよ 今は食べたくないもの」

お妙がそう言つと、新八のベッドの下から近藤トコリが現れた。

「お妙さんがせっかく作つた料理を食せないとはお前らどういうことだ！一体どんな育てられ方をしたのか 親の顔が見てみたいわ！ねえ！？お妙さん！」

「それはこつちのセリフだよ！こんのゴリラがアアア！！」

「あぎやあアアアアア！！」

・近藤 勲いんどう おと 全治2日：

その時、松葉杖まつはつばえをつきながら、沖田が土方の見舞いと称し、動けない土方のもとにやってきた。

「ん？」

「お？よう 何の用だ？」

「旦那たちこそ 俺は土方さんの息の根を…ゴホン！あーのどの調子が悪イや 見舞いに来ただけでさア」

「違うよね のどの問題じゃないよね 今息の根をどうとか言ってたよね」

「旦那 それはきつと幻聴でさア 俺 良い耳鼻科知ってますぜ 紹介しましょうか？」

「いや幻聴じゃねえって 俺の耳は正しい」

沖田はふつと神楽の方を見た。

神楽は沖田と目を合わせようとしなかった。

「………… ああ 新八君も土方さんと同室なのか」

「おーい【ペチペチ】 新八【ぺんぺん】 起きろヨ……………【パン】」

しかし新八は起きない。

「新八ももう一発行くか」



「だめよ神楽ちゃん！もつと強く叩かなきゃ…ね！【スパアーン！】」

しかし新八は起きない。

「まてまて そんな荒々しい起こし方じゃ起きるわけねーだろ 俺に任せろ」

銀時はラジカセを用意した。

「はい ポチツとな」

「ジ〜〜……『みんな〜！今日は楽しんで言つてネクロマンサー！【ネクロマンサー！】じゃあ一曲目！『お前の母ちゃん××人！』ジャジャジャ〜ン ジャジャ〜ン お前エそれでも人間かア！お前の母ちゃん××人だアア！〜」

【ぴくっ！】

寺門通の『お前の母ちゃん××人だ！』を聞くと、新八が反応した。

「ネクロマンサアア〜！！【ガバアア！】」

「コラ新ちゃん 病院では静かにしてなきや【ゴッ！】ちゃんと寝てないとダメでしょ【ゴッ！】」

ネクロマンサーと叫びながら飛び上がった新八にお妙の拳骨。

さらに止めに一発。

「お姉さん 新八君コレ 永眠したんじゃないスか？」

その時、銀時たちの前を沖田が通った。

「じゃあ旦那方 俺アこれで……」

「おお じゃあな」

銀時は、ふと土方を見てみた。

「うッ！」

土方の顔には白布が乗せられ、胸の辺りで手を組まされており、その周りには大量の花があった。

「銀ちゃん……」

「ああ……？ププッ」

「ちよっと私 売店言ってくるネ」

「ああ 言って来い言って来い ぷくく……」

銀時は声を震わせながら言った。

「あら神楽ちゃん じゃあ私も……」

「姉御 いいアル！ちよっとついでに用もあるアル！」

「あらそう…?」

神楽は走っていった。

「これ線香たいたらもつといいんじゃないね?イクね?これイクね?あ  
そうだ あれ あの叩くと チーンってなるやつ置こうぜ」

【ガー】

神楽は病院から出て、敷地内の庭を見渡した。

「ん?」

庭のベンチに松葉杖が置いてあった。

そのベンチに神楽が近づいた。

「……これ あいつのアル」

神楽はもう一度、あたりを見渡した。

すると、庭の中で一番でかい樹の下に沖田が立っていた。

「あいつ…」

神楽は沖田の後ろから、そっと近寄った。

辛い嘘より 善い本音（前書き）

沖田を追った神楽の取った行動とは！？

辛い嘘より 善い本音

「もう歩いてもいいアルか？」

「チャイナ！なんでここに…」

「散歩アルよ 足…折れたアルか？」

「ヒビで済んだよ だがあまり痛みは引いてネエ」

沖田はそう言いながらも、常人と変わらない足取りで歩いていった。

「……反省…してるアル」

「……………」

本当に反省している声だった神楽に気付き、沖田は、ふっと顔だけ振り向き、そしてベンチに座った。

「……まあ 座れよ」

「…うん」

神楽は沖田の隣にちょこんと座った。

そして、その光景を少し離れて隠れながら視聴するものがいた。

「ふふ〜ん こういうのは趣味じゃないが なかなか青春だね〜  
銀さんうらやましいなあ〜」

銀時だった。

それに気付かず、沖田と神楽は二人きりでいた。

沖田と神楽の前には、先日までの鬨いが嘘の様に平和な光景が広がっていた。

神楽は空に向かって顔を上げた。

「……今日は良い天気アルな」

確かに、空は快晴、鳥は自由に空を舞い、そして木々が揺れ、葉が揺れ、ざわざわと言う穏やかな音とともに、涼しい風が吹き通る。

「そうだな……」

しばらく沈黙は続いた。

二人は、どうしてもあの時の会話が頭から離れない。

沖田は「惚れた女」と言い、神楽は「好きな人」と言った。

神楽は自分は本音を言った。

しかしひねくれものの沖田がそんなこと万に一つでも言うだろうか？

しかもあの時は風邪で体調が悪かった。

神楽はそのことについて触れることができなかった。

「なあ……」

先に切り出したのは沖田だった。

「ん〜？」

変哲もない返事。

しかし沖田は、神楽の予想を覆す言葉を発した。

「そこまで反省するなよ あの前は好きで来たんだ しかも助け  
てもらって こっちが頭下げたいくらいだ」

何も驚くことのない言葉。

しかし沖田の発した言葉であり、それが神楽にはとてもおかしいこ  
とだった。

普段は貶<sup>けな</sup>し合い、殴り合い、敵対意識100%の二人。

相手がこうになると、神楽はふっと肩の力が抜ける。

「まだ熱引いてないアルか？」

「とつくに引いてる」

「じゃあ……」

「俺の本音だ」

神楽は顔を赤くした。

「……私 あの時助けてもらわなかったら 死んでたかもしれない  
アル それをお前が身体を張って護ってくれたアル 私…すっごい  
うれしかったアル！」

「……………」

「しかも…あんなこと言われて もっと嬉しくなったアル」

「……………」

「そして私気付いたヨ……初めてお前を見たあの時 お花見の時か  
ら 私はずっとお前が気になってたんだって 好きだったんだって  
！…」

神楽は依然穏やかな表情だった。

「……あのときお前の言葉が無かったら こんなこと言えてなかつ  
たヨ…… あの時 お前が風邪だったからあんなことを言ったの  
かもしれないけど 私 本当の気持ちに気付くことができてよかつ  
たヨ ……だから…アリガトネ……」

言い終わった後、神楽はすっと立ち上がり沖田の前を通り過ぎた。

「……気付いてたよ」

沖田が神楽を引き止めるように言い放った。



「え……」

「始めからわかってた お前の眼はあの中で一人だけ違っていた」  
神楽と沖田は顔を合わせず、互いに違う方を見て会話は続く。

「流石…アルネ……」

気付かれていた悲しみかどうか、神楽はすこしシヨンボリした。

「俺は あの時 お前を助けようとした時に気付いた」

沖田はボソツと言った。

「え？」

「『ああ…ヤベエな こりゃ 完全にやられたな』 ってな……」

「だから何が……」

「……俺は あの時も本音だった……」

神楽はとっさに振り返った。

「え…!？」

大きな風が吹いた。

「“神楽”！ 俺は ……」

風の音で沖田の声が途切れてしまった。

「え！？何？何！？ちょ…聞こえなッ！もう一回言って！ねえ！」

しかし神楽には聞き取れた様子だった。

神楽は笑顔を見せた。

神楽の本音。

沖田の本音。

銀時の尾行。

神楽は本当に好きだと言うことを伝えることが出来た。

一方沖田は、本音だったと伝える。

しかし、沖田が好きだと言ったかは不明である。

あとは、あなたの想像次第で変わります。

……銀さんの話によると、あのあと、『沖田と神楽は互いに身を寄せ合った』と言っていた。

はてさて、銀さんの言ってることは本当なのか嘘なのか……。

完！！

「チツ 昼間っからべたつきやがって……ホントッ！若いていいね！しょーがねえ…戻るとする【ガッ！】かッ！??」

銀時は小石に躓いてしまった。

「（あ…ヤベ…）」

【ドスン！】

「ヤバイヤバイヤバイ！！早くにげ……」

【ザッ】

二人がお怒りの顔で立ちふさがった。

「銀ちゃん……」

「旦那……」

「あ！ああ！お二人さん！奇遇ですね　アハハハ！あの……僕何かしましたっけ？」

「いつから？」

「え？えゝ何のことかな？身に覚えがないや」

「じゃあたった今その身体に叩き込んでやるヨ……」

「じゃあたった今その身体に叩き込んでやるヨ……」

【ドゴッ！】

「ぶべらアア……」

本当に　完……！

## 辛い嘘より 善い本音（後書き）

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました！

本編でも駄作なのに、こんなオマケまで読んでくださって、感謝感激です！！

本当にありがとうございました！！

余談ですが、感想で【ニャー助】さんから沖田と神楽くつついちゃえとのかんそうがありました…（ニャー助さん！勝手なこととしてスンません！！）それで、かなり考えた結果、私メではどうすることも出来ず、最後まで曖昧な形になってしまいました。

本当にすいません！お詫び申し上げます！

銀魂 魔王襲来篇 どうでした？

最後に、こんな駄作ですが呼んでくださった方には、大いなる感謝の気持ちでいっぱいです。

これからもよろしく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7349e/>

---

銀魂 魔王襲来篇

2010年10月10日03時59分発行